子供達とのふれあいの中から

世久見漁協女性部
部員　渡辺明美

1．地域と漁業の概況

私達の三方町漁協は、昭和５８年３月に町内の４漁協（常神、神子、小川、世久見）が合併し設立された漁協である。若狭湾に突き出た常神半島に点在する５集落と世久見湾に臨む２集落の合わせて７集落から成っており、漁業は４ヶ統ある大型定置網が主体である。

昭和６１年には、世久見集落住民にとって長年の念願であったトンネルが開通し、漁港も整備されると、新鮮で美味しい魚やきれいな海を求めて、海水浴や釣り客が今まで以上に多くなり、観光産業がより盛んになった。

常神には南国を象徴する大きなソテツがあるが、このような大きなソテツの生息は最北端であることから、観光に訪れる方が少なくない。

2．女性部の組織と運営

私達の女性部は、常神（１９人）・神子（２０人）・小川（２７人）・塩坂越（７人）・世久見（１６人）の５女性部で、昭和３２年に漁協の貯蓄増強を目的に結成され、現在に至っている。三方町の女性部員の平均年齢は４０歳位と若く、まだまだ子供に手のかかる年齢である。

漁協の合併はなされたが、女性部は現状のままとし、活動内容によって単独で活動したり合同で活動したりしている。漁協組合長はじめ部員の方々の協力を得ながら女性部の運営や活動の輪を広げている。

3．活動課題選定の動機

若狭湾を目前にした私たちの集落は、観光漁業にとっては申し分のない条件で、約８割が民宿業を営んでいる。三方町の観光協会も日々観光事業に力を入れているが、私たち女性部にとっても『観光事業の発展＝地域の発展』と考えていると言っても過言でない。

しかし、民宿業は大変に忙しく、しかも学校が休みの時がより忙しい事もあって、子供達への気配りがややもすると手薄になりがちである。そんな折、「少しでも子供達とのふれあいを深めるような機会を持てたらいいな」との声が、どこからともなく聞こえるようになった。

今回は、子供達とのふれあいについて述べてみる。

4．実践活動状況及び効果

（１）祭りの開催

さあ、子供達とのふれあいについて話し合うため女性部員が集まった。殆どの部員が義務教育の子供を抱えている。まず思い思いの発言をした。漁獲の減少・魚価の低迷等厳しい漁業情勢であること、民宿客の減少により民宿の運営が厳しくなっていること、また、客が少ないとパートを雇うことも控えるため、自分達は今まで以上に忙しくなっていること、そうなると子供への気配りがどうしても二の次になってしまうこと、などいろいろな発言があった。みんな子供のことを一番気にしながらの民宿業であるから、この話し合いはとても盛り上がった。どの子も気軽に参加できることはないかと思案した。そうだ!!、祭りがあった。祭りは、自分の子だけではなく参加する子供全員の様子がうかがえる絶好のチャンスである。しかし、一番開催日が問題になった。と言うのは、観光漁業の集落なので、土・日は避けなければならない。また、春・夏・冬の長期休暇も避けなければならない。なかなかまとまらなかったが、結局５月２７日前後（土・日は避ける）に決定した。

次は、内容についての検討である。縁日好きな子供達のために喜びそうなことを女性部員達で考えた。「飴つかみ、たこ焼き、お好み焼き、いか焼き、焼きそば、ポテト」などを企画した。

前日の準備、当日と、部員２０名が総出で役割を分担した。祭りを待つ子供達は「ワクワク、ソワソワ」としているが、当日は実に楽しそうだった。

近年では次第に、周辺地域の子供達も参加するようになってきた。また、青年部が地域の行事に行っていたお囃子を、部員の減少により維持が難しくなり、子供達に受け継いで欲しいと申し入れがあり、平成１４年より子供達が行うことになった。夜の練習などもあり、子供達は大変な様子だが、がんばっている。地域への定着と周辺地域の子供達の参加が多くなったので、学校に休校願いを申し出たところ、一昨年より半日だけ休校してもらえるようになった。

どこでも、いつでも、何でも手に入る時代であるが、子供達とのふれあいはどこででも簡単に手に入るものではない。部員手作りのささやかな祭りではあるが、今後とも大切にしたい活動の一つである。

（２）体験学習

漁業体験学習は三方町観光協会を通じ、８年前から始まった。海のない岐阜県の１中学校からの申し入れが切っ掛けだった。年々申込み校が増え、今では１０校で、約１，６００名を受け入れている。

ここで、私たち「浜の母ちゃん」女性部の出番である。持ち掛けてくれたのは観光協会だが、中味の立案、計画、運営は女性部にかかっている。

まず、体験学習に訪れた子供達の大まかな日程を紹介する。

１日目は「若狭少年自然の家」で活動するため、私たちが受け入れるのは２日目からである。まず、「若狭少年自然の家」から７キロを歩いて山越えし、入村すると同時に入村式を行い、各民宿に入る。丁度お昼時になるので、昼食は海の幸が入ったカレーライスである。みんな食欲旺盛で、多めに作るが、足りないのではと内心冷や冷やである。昼食後は、早速アジの干物作りに挑戦する。女性部員をはじめ、民宿の家族みんなが講師となり地区で水揚げされた新鮮な魚を１人が３匹ずつ開き、各自番号を付けてカゴに

入れて干し、自分の開いた干物は土産に持ち帰るのである。

次に、船での学習となる。生け簀の魚の餌やりと、釣りを体験する。釣れた魚は夕食の食材となる。夕食は、全員が「美味しい、美味しい」を連発しながら食べるのでとてもうれしく、作りがいがある。後片づけもみんなで行い、その後「民宿の人と語る会」と「ロープワーク」がはじまる。語る会では、海のこと、漁業のこと、民宿業のことについて生徒さんから質問を受ける。ロープワークでは１人ひとりロープをもって、いろいろな結び方を教える。生徒達は、難しい難しいを連発しながら試行錯誤しているが、結べたときの喜び、感動は豪快である。思わず一緒に拍手をしてしまう。このロープワークは日常生活の中でも役立つと好評である。

２日目は、朝６時に大敷網の見学である。その後全員で浜掃除をし、朝食、生徒からの心のこもった色紙の贈呈があり、退村式を行い、全日程終了である。

大事な子供さんを事故やケガなどなく、全員無事に帰ってもらえるよう集落全体でお世話をする。短期間で全員の生徒さんに触れ合うのは難しいが、生徒さんにとって思い出のアルバムの１頁にしていただけるようこれからも出来る限り努力していきたいと思っている。と同時に、次にはどんな生徒さん達が来てくれるのかを心待ちにする日々の中で、部員達は、生徒に喜ばれる企画の工夫に余念がない。

民宿のおかみさんの声

＊　生徒さん達の礼儀が正しい。

＊　アジの干物作りは初めての生徒さんが殆どなのに、飲み込みが早く、すぐに包丁の使い方が上手になってくる。

＊　いただいた色紙は、今後の励みになる。

＊　事前に海のこと、魚のことを学習してくる生徒がいて、感心する。

＊　素直な心の生徒達との出会いは、自分自身がとても優しい気持ちになり、明日からの活力になる。

（３）学校のゆとり授業

子供達とのふれあいを高めるとともに、魚に親しんでもらおうと小学校のゆとり授業に女性部や、時には経験豊かなお年寄りが講師となり、「地産地消、安心安全」しかも新鮮な海の恵みがいっぱい詰まったかまぼこ作りや、干物作りを実習している。先生や子供達との交流が出来る、とてもよい機会である。

（４）その他

福井県では９月１４日から１ヶ月間若狭路博２００３が小浜市を舞台に、メインイベント「水と炎の千年祭」が開催された。ここにおいて女性部は、福井の海を代表する四季折々の旬のさかな１７種を中心とした自作の料理集「越前・若狭旬の肴さかな魚」の中から魚料理を披露した。開催時には教室いっぱいになり、周りは見学者で人垣が出来る等、大変好評を得た。

なお、「越前・若狭旬の肴さかな魚」の料理集は4,400冊印刷したが完売し、昨年1,000冊の増刷をした。

５．波及効果

女性部の手作り企画である祭りや体験漁業を通して、次代を担う子供達との関わり、

青少年の育成は、成長期の子供を持つ母親である私たち女性部には欠かすことのできない課題である。しかし、決して私たち女性部だけの力でできるものではない。忙しい民宿経営であるにもかかわらず、陰ながらの男性の協力と、地域のあたたかい皆さん達の激励により、このような活動ができることに感謝するとともに、地域力の偉大さを痛感させられた。と同時に、いずれ地域の活性化に結びつくであろうと確信している。

6．今後の課題

殆どの女性部員が民宿業を営んでいるので、女性部活動がややもすると停滞気味である。これまでの活動を振り返ると、一人ではできなくても女性部活動だからできることがたくさんあることに気付いた。皆が力を合わせれば大きな力となる。私は昨年のフレッシュ・ミズ・プログラムに参加したが、全国の皆さんの元気なパワーに驚くと同時に、私自身も何かしようという熱い思いが湧き出てきた。今後は、マンネリ化が問われている女性部活動であるが、背伸びするのではなく、日頃のささいなことも逃がさず、試行錯誤していきたい。そして、子供達が自分の生まれた故郷(ふるさと)を愛せるように、美しい海を、自然を守り、次世代に継承していくために、女性部が地域のリーダー役としてがんばりたい。